

第30話（17頁） お百姓と荷車

お百姓が荷車を山からおろそうとして、たづなをしっかりと両手でにぎって
いました。たづながプツンと切れ、荷車がかってに山を下っていきました。
お百姓は、たづなひとつをにぎったまま、大声でさげびました。
「止まれーっ！」

「うーん、話が短くて何を伝えようとしたのか、正直、見当つかないよ。」

「そうだね。お百姓は荷物を積み込み過ぎたのかな。」

「あるいは、手綱の強度が不十分だったか。」

「どっちにせよ、お百姓の想定を超える事態が起きちゃった。」

「事前の準備はきちんとしておくように、という教訓だとすれば、ちょっと堅苦しすぎる。」

「そう難しく考えなくてもいいんじゃないか。お百姓は、大変なことになって呆然としてい
る。意味もなく、千切れた手綱を握っているだけだ。」

「『止まれーっ！』と叫び声で終わっているのも、とても効果的だ。」

「臨場感がよく出ている。お百姓の心理状態も分かる気がするなあ。」

「気が動転して、ただただ叫ぶしかなかった。」

「本当にそうだね。私が歩いていてオートバイの男にバッグをひったくられたときも、ひた
すら『止まれー』と大声を上げるだけだった…」

「ところで、荷車はどうなったのか。その先を子どもたちに考えてもらう手もあるよ。」

「木に当たって止まった、なんていう答えもあるかも。」

「あるいは、崖から転がり落ちて粉々になっちゃった、とか…」